

先週の回答



山田さん家(ち)の夫婦ケンカは近所の名物になってる。今日も夕方になると、山田家からは激烈なケンカの声が外まで洩れ、道行く人が立ち止まって聞き耳を立てている。

夫婦だからケンカが全くないなどというわけにはいかないが、ふつう外に漏れないように気を遣う。山田さん家のケンカはその気遣いが無い。掴みあいのケンカに似た声が隣り近所に筒抜けにひびく。

「二度とそんな口がきけないようにしてやる！」

「おやりなさい」と落ち着いた女房の声。

「どうぞ、おやりなさい。それで気がすむんでしたら」

「この塩辛は何だ！賞味期限が切れて

る。オレを殺す気か！」

「死にはしないわよ。賞味期限が一ヶ月ぐらい切れてるからって」

今日は塩辛の賞味期限が原因かと、近所の人ほうんざりして出した首を引っ込めて窓を閉める。立ち止まっていたギヤラリーも散る。

次の日の夕方、隣りの小林さん家の居間。晩酌をしながら小林さん。

「今日は、あめいせいそうはないようだな」

「何ですか？あめいせいそうって」

「蛙鳴蝉噪。カエルやセミが騒がしく鳴く意味だ。うるさいだけで、くだらないってことだ」

「ぶっ、ぴったりね」と奥さん。

ガラ！「こんばんは」

「だれか来たみたいよ」奥さんが玄関に



出ていく。むずかしい顔の中年男と後ろに付いている若い女性を一瞥して小林さんはドキッと肝を冷やす。

「何でしょうか？」と奥さん。

「お宅のご主人がうちの娘を・・・」とその時、蛙鳴蝉噪が開始された。

「耳をふさぎながら何か叫んでいる客は、

「うるさくてかなわん、出直してくる」と出ていった。

その客は、小林さんの職場に勤める花園ヒロ子ちゃん(二十歳)と、むずかしい顔の男は、たぶん彼女の父親。娘は一夜のあやまちで小林さんの子を腹に宿している。どなり込んできた父親は、隣りの大声のケンカの声で出直すことにしたらしい。

次の日、小林さんは手みやげを手に山田宅にお礼に寄った。

